

翻訳の哲学における三つのパラダイム

ロサ・オムラティグ

Rossa Ó MUIREARTAIGH

本稿は著書、*Begotten, Not Made: Explorations in the Philosophy and Sociology of Religious Translation* (New York; Dresden: Atropos Press, 2015) の第一章からの抜粋である。

1 翻訳の哲学

翻訳の哲学という明確な分野はない。しかし、翻訳についての前提や考えは多くの哲学者の作品によく見られる。それらは、テキストの中で、意味がどこに位置するかによって三つのパラダイムに分けられる。そして、意味が単語にあるものを「単語中心パラダイム」、命題にあるものを「命題パラダイム」、記号にあるものを「記号パラダイム」と呼ぶことにする。

2.1 「単語中心」パラダイム

「単語中心」パラダイムの前提は、あることばの意味は他のことばに依存せず、それ自体で形成される。そのパラダイムの代表的な哲学者はエルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) やエミール・バンヴェニスト (Émile Benveniste) である。たとえば、カッシーラーによれば、ことばの意味は最初から非常に局在的な文脈と具体的 (固有の) 時間的文脈の中で生まれる。ことばには、具体的な本質がある。それゆえ、意味をことばから抽象化する翻訳という行為は厄介な行為なのである。

バンヴェニストによるとコトバは文化や文明によって規定されている「考え方の種類」を反映している。それゆえ、翻訳の対象となる言語、つまり起源テキストにおける「考え方の種類」は把握できないのである。

「単語中心パラダイム」は、よく宗教で見られる。特に多くの宗教は次

の二つの考えを主張している。第一に、ある宗教のテキストは神などのような聖なる起源から直接伝えられたメッセージなので、そのテキストの中のコトバは極めて神聖な地位にある。それゆえ、そのコトバを訳したら、その神聖なる地位が多少なりとも低くなってしまう。

第二に、神聖なコトバは神などを表わす記号ではなく、それ自体が神である。神聖なコトバは意味をあらわす媒体ではない。コトバの音そのものに意味がある。ゆえに、翻訳できない。

ロマン主義のナショナリズムはネイション（国や民族）の独自性を強調する。ネイションの言語もその独自性を反映している。それゆえ、国の言語の中のコトバや概念などは翻訳できないと言われている。たとえば、マルティン・ハイデッガー（Martin Heidegger）によれば、フランス語やラテン語では、ギリシア語やドイツ語の哲学概念を完全に表現することができない。これと同様に、鈴木大拙は西洋の言語は東洋の思想を表すことができないと強調した。

文化人類学でも、言語の独自性の強調がよくみられる。たとえば、ベンジャミン・リー・ウオーフ（Benjamin Lee Whorf）によれば、ある言語を話す人の思考はその言語の文法や語彙によって形作られる。というのは、あらゆる言語の文法や語彙は固有の論理や世界観を作り出しているからである。

2.2 「単語中心パラダイム」への反論

単語中心パラダイムには重大な認識論上の問題がある。

まず、言語や語彙の聖性という考えは社会や制度の権威に基づいている。言語学が正当化しているのではない。いかなる「神聖なテキスト」であっても、世俗的、一般的なテキストと同様に翻訳できる。

また、ある言語の語彙を目標言語に訳すことはできないと主張する考えは、双方の言語をそれらの言語から理解できるという前提に立っている。ところが、その主張を正当化するためには、双方の言語のあいだで翻訳が可能かどうかを判定する「第三の言語」が必要となる。しかし、その「第三の言語」の正当性を判定するには、さらにもうひとつの言語が必要である。そのように「第三の人間」論法は無限後退となってしまふ。

同様に、「単語中心パラダイム」は循環論法に陥る。たとえば、前述の

ように、ある言語の語彙や文法は別の言語で表現することのできない特別な世界観を表していると言われている。しかし、その証拠を示すためには、その言語は翻訳される必要がある。一方で、翻訳は起点言語を誤って伝えるが、他方で翻訳は、その誤りを中立の立場で測定する道具でもあるという矛盾をきたすことになってしまう。

要約すれば、「単語中心パラダイム」は原子論主義なのである。すなわち、言語の意味が離散した単位として語彙のレベルで存していて、そのレベルを超越できないのである。このように、単語中心パラダイムはゼノンのパラドックスに巻き込まれることになる。つまり、単語中心パラダイムはどうやって意味が語彙の間を行き来するのかを説明できない。

3.1 「命題パラダイム」

「命題中心」パラダイムにとって、意味は個々の単語にあるのではなく、単語と単語の接続によって形づくられる。単語の連鎖を通して、「命題」といえる意味の単位が作られている。「命題」は世界、もしくは現実について、「真な言明」(truth statement)を行っているのである。

単語と単語から形成された文章の意味は抽象的で普遍的な意味の領域から発生している。この意味において、(翻訳の) 起源テキストと目標テキストは同意義なのである。そうでないと、本物の翻訳とは言えない。すなわち、「命題パラダイム」にとって、翻訳は全く問題のない行為なのである。たとえば、異訳は異なる世界観に基づくものではなく、過ちに由来している。人間は合理的な動物としていつも互いに翻訳できるという訳である。つまり、翻訳とはテキストの真理を歪めることではない。むしろ翻訳を通して、そのテキストに真理や合理性があるか否かを判定することができるのである。

ゴットロープ・フレーゲ (Gottlob Frege) をはじめ、分析哲学の流れの中にいる多くの哲学者が多かれ少なかれそのパラダイムに従っている。たとえば、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell)、ルドルフ・カルナップ (Rudolf Carnap)、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein)、ドナルド・デイヴィッドソン (Donald Davidson) などが言語と合理性の関係を主張し、それを証明するために翻訳の普遍性を強調している。

3.2 「命題パラダイム」における問題

では、どうやって起源テキストと目標テキストは全く同様の意味をあらわすということが実証できるのか。それはウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン (Willard Van Orman Quine) の翻訳の不確定性論などの問題である。ある言語の語彙の翻訳が正しいかどうかを確認するためには、その言語内にある他の語彙の理解が必要となる。更に、確認に用いた他の語彙の正当性を確認するためには、その言語内からさらに別の語彙で確認することが必要となる。つまり、翻訳の正しさを実証する根拠は翻訳なのである。すなわち、その理解が正しいか否かを確定する根拠が存在しないというようなミュンヒハウゼンのトリレンマに陥ってしまう。

一般的な日常の言語使用においては、真否を断言する命題に遭遇することは稀である。普通の言語使用では、真否と関係がない言語行為がよくある。また、日常の言語使用では文字通りの意味を超越する場面もよくある。そのような言語を解釈するためには、文字通りの意味ではなく、話し手の意図を理解しなければならない。すなわち、言語の意味が論理的な命題の根拠に基づいていることを主張する「命題パラダイム」では言語行為や日常言語の使用における語用論などを説明しにくい。

「命題パラダイム」によると、起源テキストと目標テキストの両方の意味は言語の外に存在する普遍的な精神的領域の中で写像されるのである。つまり、読者の起源テキストと目標テキストの間に同じ像を思い描いている。しかし、その精神的領域にアクセスするためには、言語しか方法はない。それゆえ、その精神的領域とは翻訳理論にとっては、余分なものである。すなわち、起源テキストと目標テキストの間の意味を表す論理的な命題は、その起源テキストのもうひとつの翻訳と見なされる。命題の論理的な命題は他の言語ではなく節約の原理に従う。だが、論理的な命題は他の目的テキストと比べて、より直接的に起源テキストにアクセスしている訳でない。

「命題パラダイム」によると、文章の中の単語は文章の命題を表す部品でしかない。しかし、それらの部品の間には相互作用が働いていて、命題が意図する以上の含意やリズムを生み出す。概して、テキストというものはすべからく自ら内包を生み出し、その内包の意味と外延の意味の間の境界はいつも不明瞭なのである。別の言い方をすれば、全てのテキストは複

数の解釈を伴う。

4.1 「記号パラダイム」

「記号パラダイム」とは他のパラダイムと異なり、本質主義ではない。「記号パラダイム」では、意味は不安定なのであり、固定されている訳ではない。

意味は記号として存在する。記号は人間の解釈によって活性化する。しかし、人間は特殊な歴史的かつ社会的な状況に埋め込まれている。ゆえに、記号の解釈は変化することになる。そして、起源テキストの意味はテキストの中ではなく、翻訳者の頭の中で決定する。翻訳者は社会と歴史に埋め込まれているので、翻訳の正確性を判断するのは、結局、社会の判断しかない。それと言っても意味は恣意的であると言う訳ではない。双方の理解度は記号の一貫性と再現性に依存する。一貫性と再現性とは社会の判断の基準である。

4.2 記号パラダイムの課題

意味が社会に依存する記号パラダイムは、相対主義に陥ってしまう恐れがあると言える。しかし、翻訳は相対主義と絶対主義間の間に存在しているものなのである。一方、起源テキストを理解するためには、翻訳者は絶対的な基準が必要である。テキストを理解することと理解しないことの差異は絶対なものであると言える。同様に、翻訳された目的テキスト及び起源テキストと全く関係がないテキストとの差異も絶対的なものである。その点で、翻訳は全く相対的ではない。とはいえ、ある起源テキストの理解や翻訳された目標テキストとして有効性が認められる範囲は極めて広い。その範囲は理論的には、有限であるが、その範囲の中の選択肢は、まるで無限に存在するかのようである。

起源テキストの翻訳には多くの可能性があることを考えれば、どの目標テキストが最適だと判断できるだろうか。この問題を解決するには、翻訳をアブダクション(仮説的推論)として考えると良いだろう。アブダクションとは、情報が不足している状況においても世界を一貫して理解することができるということである。記号論では、アブダクションは記号を理解す

るため、その記号の表面の意味を理解することだけではなく、記号の意味を文脈全体から推し量ることが必要なのである。同様に、起源テキストを翻訳する際、そのテキストの全体的な文脈により解釈の正確性が決められる。

4.3 「記号パラダイム」の信頼性

「記号パラダイム」は他のパラダイムと比べて、アノマリー (anomaly) が最も少ないため、翻訳という現象を最もうまく説明できる。

まず、「記号パラダイム」は翻訳を自然な人間の行為としてみなす。「単語中心パラダイム」と異なり、起源言語を、翻訳できる部分と翻訳できない部分に分けない。従って、「単語中心パラダイム」の知識論の自家撞着を回避する。

本質的ではない「記号論パラダイム」は、「命題パラダイム」と異なり、普遍的な基準を探さないため、意味論のレベルだけではなく、語彙、語用論、レトリックなどを含めて、テキストの全体的な文脈を考慮できる。

決定的な翻訳という考えを拒否する「記号論パラダイム」は可謬主義である。よって、目標テキストの多様性を説明できる。

つまり、「記号パラダイム」は、歴史的な翻訳という現象を最も現実的に表す。

本稿の日本語のチェックを手伝っていただいた奥野良知先生に深く感謝いたします。日本語の間違いは、すべて著者の責任にあります。

参考文献

- Heidegger, Martin (1981) "Only a God Can Save Us." Translated by W. Richards. In *Heidegger: The Man and the Thinker*, 45–67. Edited by T. Sheehan. Chicago: Precedent Publishing.
- Whorf, Benjamin Lee (1956) *Language, thought, and reality: selected writings of Benjamin Lee Whorf*. New York: Chapman & Hall.
- カッシーラー・エルンスト (1972) 『言語と神話』岡三郎・岡富美子共訳、東京：国文社
- カルナップ・ルドルフ (2007) 『論理的構文論：哲学する方法』吉田謙二訳、

翻訳の哲学における三つのパラダイム

京都：晃洋書房

デイヴィッドソン・ドナルド（1991）『真理と解釈』野本和幸他訳、東京：勁草書房

バンヴェニスト・エミール（2013）『言葉と主体：一般言語学の諸問題』前島和也・川島浩一郎共訳、東京：岩波書店

フレーゲ・G.（1999）『哲学論集』黒田亘・野本和幸編、東京：勁草書房

ラッセル・バートランド（1986）「指示について」『現代哲学基本論文集—第 I 巻』清水義夫訳、東京：勁草書房

ヴィトゲンシュタイン・ルートヴィヒ（2014）『著論理哲学論考』丘沢静也訳、東京：光文社